



宮島達男《Floating Time》2000年 作家蔵



千葉市美術館ニュース「C'n」(シーン)96号

vol. 96

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

〔編集・発行〕千葉市美術館 〒260-0013 千葉市中央区中央
3-10-8 TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316 Chiba City
Museum of Art 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan
<https://www.ccma-net.jp/>
〔発行日〕2020年10月30日
〔印刷〕株式会社 エイチケイ グラフィックス

 Instagram **ccma_jp**

 Twitter **@ccma_jp**



館長のつれづれだより わが社中－水沼啓和君

「1968年展、素晴らしかった」「美連協大賞に推薦したい」「亡くなった人でも美術館は賞を受けてくれるだろうか」という話が、ある会議の隣席に座っていたこの賞の委員を務める友人からありました。「賞に死んだとか生きているとかは関係ないと思う」とわたしは当然のことながら答えました。

「1968 激動の時代の芸術」展を担当、その会期中に亡くなった水沼啓和君は、わたしがかつて勤務した大学の卒業生でした。専攻が違うので直接指導をすることはありませんでしたが、わたしのゼミに属する学生たちとも親しかったので、大学から歩いて行ける距離にある六本木に繰り出し、しばしば夜を徹して飲みかつ議論を交わしたことがいまも鮮明に脳裏に残っています。身体も大きい美丈夫な水沼君は酒も相当に強かったと思います。

ある日、千葉市美術館の開設準備室に勤務していた浅野秀剛さんが、研究室を訪ねて来られ「小林忠先生にもお話したのですが、いま学芸員を募集しています。先生のところにも誰かいませんか」というので、希望者を募りましたが、生意気にもゼミ生に色よい返事を

するものがなく、水沼君が一人「行きたいです。ぼく行きます」と意欲を示すので、応募をすすめたところ運よく採用になったと聞いています。

わたしは初代館長の辻惟雄さんやその席を譲ってくれた二代目館長の小林忠さんとは親しい間柄にあったので、開館以来千葉市美術館をしばしば訪ね、件の学習院大学や東京大学の卒業生を交えた飲み会には同席したのですが、水沼君とはついぞ顔を合わせた記憶がありません。

2011年の秋の終わり頃、学生時代に『芸術新潮』などで評論を読んだことのある瀧口修造に関わる展覧会（「瀧口修造とマルセル・デュシャン」）を開催しているというのでぶらりと美術館を訪ねたところ、珍しく水沼君が学芸員室にいて、「展覧会みますか?」「慶應義塾からも作品を借りてます」などと言いながら、大学ではこの辺りを研究していたので、内心期するところがあつたのだらうけれど、なんとなくハニカんだ様子で、展覧会の主旨や作品の特徴などについて丁寧に説明してくれたことが思い出されます。

開館以来、千葉市美術館で開催した展覧会やその図録を見ると、水沼君は、開館記念第二弾にあたる「Tranquility—静謐」展の企画に加わり図録の編集や翻訳を担当しています。この展覧会に参加した作家のうち、2015年に自らの手で杉本博司の個展を実現していますが、企画はしたものその死によって直接携わることの出来なかった宮島達男展は、後継者的な立場にある森啓輔学芸員が、水沼君の遺志を継ぎ、作家との緊密な信頼関係を築いて、現在開催中の「宮島達男 クロニクル 1995-2020」を見事に立ち上げました。みなさまには是非ご覧くださいませようご案内申し上げます。

わたしが千葉市美術館に来ることを聞いて、課長の田辺昌子学芸員に「先生が来たら飲み会には出なくてはいけないか」と水沼君は真顔で言ったとのこと。水沼君は知られるように人工透析を長くしていました。飲み会に参加し難い知って、意地悪く「出てこなくていいんだよ」などと半ばからかうと「計画的に予定を立てれば大丈夫」と反論するの

です。倫雅美術奨励賞を水沼君が受賞した際、「式に出てくれますか」と言うので「うん」と返事をし、式後に赤坂で二次会をした時には、予め準備をしていたらしく、久しぶりに二人で痛飲しました。

館長室にわたしがいると「いいですか?」と入って来て暫く計画中の展覧会の話をして行くのですが、そうしたなかで、将来の美術館像をも語り、すでに評価の決まった作家といまだ未知数であるが将来性を見抜いて若い作家の展覧会も二本立てで行うべきという考えを主張して、前者は自分が、後者を畑井恵学芸員に託したいと少し戸惑いながらも楽し気に述べていました。昨年、畑井学芸員は、水沼君の指導や期待に確かに応え、現代アートチーム目 [mé] による「非常にはっきりとわからない」展を立派に成功に導きました。

美術が大好き、展覧会には持てる全力を尽くす、何事にも策を弄することのない真っ直ぐな性格の、わが社中の快男児だと、水沼君を想うたびに、わたしはいつもそのように思うのです。

〔館長 河合正朝〕

宮島達男 | クロニクル 1995-2020

Tatsuo Miyajima: Chronicle 1995-2020

8・7階企画展示室で開催中の「宮島達男 クロニクル 1995-2020」は、現代美術家・宮島達男氏の首都圏では12年ぶりの大規模個展です。LEDのデジタル・カウンターを用いた作品をはじめ、25年間の制作や活動を「クロニクル（年代記）」として編みあげる本展覧会。背景やみどころを担当学芸員に聞きました。

——まずは、関東圏では12年ぶりの大規模個展が千葉市美術館で開催されることになった経緯をお聞かせください。

宮島さんは、千葉市美術館開館記念展の第二弾にあたる「Tranquility—静謐」（1996年）という企画展覧会に、《地の天》（1996年）を出品されました。その後、《地の天》は千葉市美術館に収蔵され、コレクション展を通して、たくさんの方々に親しんでいただいています。美術館とも関係の深いアーティストということで、拡張リニューアルオープン・開館25周年記念展を開催するにあたって、現代美術では宮島さんが候補に挙がりました。

——「クロニクル 1995-2020」というタイトルは、どのように決まったのでしょうか。

いくつかのタイトル案を宮島さんと相談しましたが、最終的に宮島さんから提案いただいた「クロニクル」というキーワードになりました。「クロニクル」は、歴史を記述する方法を意味する言葉です。そこに、宮島さんの25年間の活動を考えるという目的から「1995-2020」がつけました。

——起点が1995年にあるのは、《地の天》の制作が1995年に行われていたことも理由のひとつでしょうか。

「1995-2020」には、千葉市美術館が歩んできた25年間という意味も込められています。リニューアルにあたって過去を振りかえりながらも先に進む、未来を考える展覧会にしたいと考えたときに、永く愛されてきた《地の天》は重要になるのではないかと思います。《地の天》を展覧会の核とする構想を宮島さんに相談したことは、タイトルのひとつのきっかけになっています。

——25年間の作品や活動を横断するような個展は大変貴重ではないかと思います。展覧会構成やコンセプトはどのように決まっていましたか。

1年半ほどをかけて展示プランを練っていきました。最終的には、はじめに宮島さんから提案を受けたプランがより深まり、発展させていったかたちになったと思います。今年に入ってから新型コロナウイルスの影響もあり、宮島さんにも多くの時間を割いていただき、作家の活動の多様性を伝える作品が加わっていきました。

——宮島さんは、デジタル・カウンターのイメージが強いと思いますが、今回は、映像やパフォーマンス、プロジェクトの展示もあり、幅広い作品を楽しむことができます。

宮島さんは、デジタル・カウンターを使用するアーティストとして世界で認知されています。だからこそ、これまで見逃されがちだったパフォーマンスやプロジェクト形式の作品を、しっかり見せたいという思いがありました。LED作品、パフォーマンス、プロジェクトの3つの活動が柱となって、それぞれが影響し合いながら、発展していったことが感じてもらえる展覧会になっているのではないかと思います。

——なかでも、「時の蘇生・柿の木プロジェクト」は展覧会のなかで大きく紹介されています。宮島さんの25年間の活動を振りかえるにあたって、欠かせない活動であるということでしょうか。

私自身が前職で「時の蘇生・柿の木プロジェクト」の収穫祭（活動の10年目に行われるイベント）に立ち会えたこともあり、プロジェクトの可能性をもっと考えたいという思いがありました。ただ一方で、プロジェクトについて十分な理解がされているかというと、そうではない部分もあります。プロジェクトの開始にあたって、映像作家の林勇氣さんに参加いただき、林さんの映像作品を会場に展示いただけたことは、大きなチャレンジだったと考えています。

——さらに今回は、千葉市美術館の所蔵品とのコラボレーション作品もあり、その手法も大変おもしろいです。

「リニューアルオープン」には、美術館が新しく生まれ変わるという意味が込められています。25年間で収蔵してきた作品自体を過去として扱うのではなく、現代美術のアーティストが新しい生を収蔵品に吹き込む今回のコラボレーション作品は、美術館の目的とも合致しているように思います。

——最後に、思い入れある作品や展覧会の見どころがありましたら、ぜひ教えてください。

《地の天》と初公開となる新作が、美術館という1つの場所で展示される空間構成は、いろいろなことを感じていただけるのではないかと思います。「クロニクル」とは、年代順に並べていく考えなのですが、宮島さんの25年間の活動のなかで変わっていることと変わっていないことを、作品を見る体験を通じて感じてもらえることを期待しています。

——「クロニクル」なので、制作年もぜひ気にしながら鑑賞していただきたいですね。

宮島さんの作品のすごいところは、人々がふだん暮らしている時間や空間の感覚が、作品を見ることで変わっていくところだと思います。これまでの価値観が変化したり、新しいものごとの見え方が芽生えたりする。この展覧会では、そういった経験を担当者としても大事にしたいと考えました。宮島さんの作品の鑑賞や参加を通じて、身の回りの生活が豊かになるきっかけに今回の展覧会がなればいいなと思っています。

〔話し手：学芸員 森啓輔〕

千葉市美術館拡張リニューアルオープン・開館25周年記念

「宮島達男 クロニクル 1995-2020」

9月19日(土)～12月13日(日)

開館時間 10:00～18:00

(金・土曜日は20:00まで)

休 室 日 10月5日(月)、10月19日(月)、
11月2日(月)、11月16日(月)、
12月7日(月)

映画「ヨーゼフ・ボイスは挑発する」 上映会開催



© UPLINK

12月5日(土)、12日(土) 14:00～(13:30開場予定)
11階講堂にて／先着80名(当日12:00より1階さや堂ホールにて整理券配布)／参加無料(要展覧会チケット・半券可)



関連図書紹介中！



4階びじゅつライブラリーでは、特集ブースで「宮島達男 クロニクル 1995-2020」にまつわる本を揃えています。p.4ではその中からおすすめ本を紹介。ぜひお立ち寄りください。

オリジナルグッズ販売中！

1階ミュージアムショップ「BATICA」では「宮島達男 クロニクル 1995-2020」オリジナルグッズを販売中！アクリルキーホルダーやTシャツ、ステッカーなど、作品に使われているデジタル数字をモチーフにしたグッズがそろっています。



アクリルキーホルダー



ステッカー

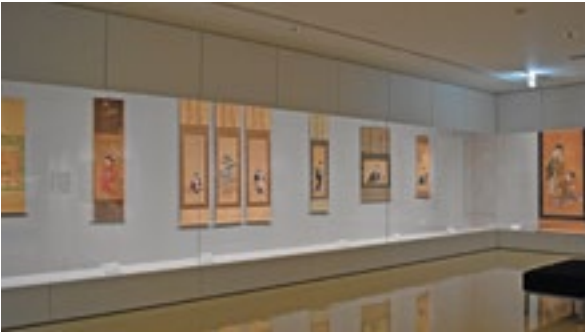
千葉市美術館が誇るコレクションを堪能！
常設展示室へようこそ



千葉市美術館には、これまで、常設展示室がありませんでした。たくさんの魅力的なコレクションを所蔵していながら、年に数回の所蔵作品展でしかお見せする機会がなく、美術館としても心苦しく思っていました。みなさまからの開設を願う声も届くなか、拡張リニューアルを機に、ついに5階に常設展示室がオープンしました！

展示作品は、3つの収集方針「千葉市を中心とした房総ゆかりの作品」「近世から近代の日本絵画と版画」「1945年以降の現代美術」に沿って構成。季節や行事、企画展などにあわせ、選りすぐりの作品を展示しています。千葉市美術館のコレクションは、約10,000点。まさに選り抜かれた珠玉の作品たちです。

さらに、驚くべきが展示替え。なんと、1ヶ月おき(現代美術は3ヶ月おき)に展示替えを行っています。毎月見られる作品が変わるので、コレクションの豊富さを実



感していただけること間違いなしです。

「千葉市美術館コレクション名品選2020」

休室日：毎月第1月曜日

会場：5階常設展示室

★現代美術コーナーでは、「宮島達男 クロニクル 1995-2020」に関連し、宮島達男氏の恩師である榎倉康二を特集しています。写真作品17点のほか、宮島氏が東京藝術大学在学中に制作した榎倉とかかわりのある作品を特別出品しています。(12月28日(月)まで)



特集 榎倉康二・宮島達男

2021年1月5日(火)からは
新しい展覧会が3つ始動！



千葉市美術館拡張リニューアルオープン・開館25周年記念

「ブラチスラバ世界絵本原画展

こんにちは! チェコとスロバキアの新しい絵本」

2021年1月5日(火)～2月28日(日)

会場：8階企画展示室



千葉市美術館拡張リニューアルオープン・開館25周年記念

川村コレクション受贈記念

「田中一村展—千葉市美術館収蔵全作品」

2021年1月5日(火)～2月28日(日)

会場：7階企画展示室

田中一村《アダンへの海辺》1969年 個人蔵(千葉市美術館寄託)
©2020 Hiroshi Niiyama

つくりかけラボ02

「志村信裕 | 影を投げる」

2021年1月5日(火)～4月4日(日)

会場：4階子どもアトリエ

志村信裕《赤い靴》2009年(参考作品)



ちばしびで
飲んで食べてくつろいで

拡張リニューアルオープンにともない、千葉市美術館のなかに3つの飲食店がオープンしました。11階にはレストラン、1階にはカフェ、そして地下1階にはなんとお酒が飲めるお店が！ 千葉市美術館で、アートも食もお楽しみください。

11階 レストラン



優雅亭 盛山 千葉市美術館店

若葉区加曽利町で17年続く本店の味が千葉市美術館でも楽しめる！ 1日20食限定の四季彩御膳は、色鮮やかで上品なお料理です。徐々にメニューも増える予定ですのでご期待ください。11階からの眺めも抜群です。

営業時間：11:30～14:30

休業日：毎週火曜日

1階 カフェ



Café de Seizan

窓際に面した開放的なカフェでは、飲み物やパスタやトースト、パンなどの軽食を楽しめます。ゆったりとしたソファは座り心地抜群。さや堂ホール横にあるので、千葉市美術館の建築もあわせて味わえます。

営業時間：10:30～16:00

休業日：毎週月曜日

B1階 ちよい呑み処



酒彩亭 盛(sakari)

気軽に立ち寄っていただける、セルフサービスのちよい呑み処です。リーズナブルなお値段も嬉しい！ とくに千葉の地酒はラインナップ豊富。鑑賞後に一杯、お酒飲みながらアート談義なんていかがでしょうか。

営業時間：16:30～20:30

休業日：毎週月・火曜日



ワークショップパートナーによる
ワークショッププログラム

11月

▼
12月

ワークショップパートナーは、千葉市美術館とタッグを組み、それぞれの専門性が光る体験の場を企画し、提供する方々。幅広い年代の人たちへ、魅力的なプログラムを届けていきます！ 各プログラムの詳細や参加方法などは、ホームページからご確認ください。

美術館で開催



デザイナー気分deコラージュ！
写真を切り貼り～ワタシの過去・未来を「アート」に～

11月29日(日) 13:00-15:30 / 申込締切:11月18日(水)

講師：桜井まどか(美エイジング®協会代表、アートセラピスト)

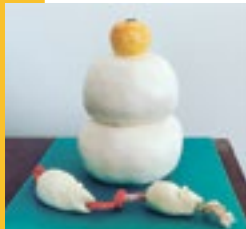
雑誌やチラシから写真を切りとり自由に構成する「コラージュ」は、彩色やパーツによるデコレーション等も楽しめる技法です。美術館25周年・市制100周年にちなみ、あなたの時間をふり振り返り、未来を考えるきっかけになる1枚を創りましょう。

陶器の鏡餅をつくろう！

12月3日(木) 10:00-13:30 / 申込締切:11月3日(火)

講師：羽山加奈子(陶芸家)

ずーっと使える鏡餅。コロンとしたフォルムは愛嬌たっぷり。好きなフルーツをてっぺんに。空き時間に来年の干支の丑も作ります。一緒にお正月の準備をしませんか？



オンラインで開催



マジカルインク×アート

12月6日(日) ①10:15-12:15 ②13:30-15:30 / 申込締切:11月21日(土)

講師：FLT(ワークショップクリエイター)

〇〇すると色が変わる?! 不思議な「マジカルインク」を使って、オリジナルトートバッグを作ります。想い、描いて、考えて、自分の「好き」を思いっきり表現しましょう！

ダンスであそぶアートする
～クリスマスダンスパーティーを演出しよう～

12月20日(日) 10:30-12:00 / 申込締切:11月25日(水)

講師：長瀬陽子(DANCE ASOBU CREW・ダンサー)

今年のクリスマスは子どもが主催のおうちダンスパーティー!簡単なクリスマスダンスでイメージを膨らませ、オリジナルの衣装制作やステージ演出、装飾にもトライ。ダンスから広がる無限の想像を形にして、世界にひとつだけの素敵なダンスパーティーを企画しよう。



美術館の仕事を 紹介します！

その 10 鑑賞ツールの制作

常設展示室鑑賞ツール

みてみて! どれどれ? ちばしびコレクション

作品を見つけて楽しむ「はっけんツール」と、作品について考える「ふかめるガイド」の2冊セット。ツールとガイド、それぞれでも楽しめ、ふたつセットで使うとより鑑賞が深まるように作られています。



これまでの企画展で制作した鑑賞ツール

「ミュシャと日本、日本とオルリック」鑑賞ツール につちこ早見表(2019年)

日本とチェコの美術のかかわりを、星座早見表を模した形式で紹介した鑑賞ツール。



「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」 鑑賞ツール(2019年)

作品のなかから「しよくぶつ」や「しか」、「いぬ」などを探し、ビンゴを完成させる鑑賞ツール。



「宮島達男 クロニクル 1995-2020」鑑賞ツール

9種類の鑑賞カードから、サイコロで出た目のカードがもらえる鑑賞ツール。カードには作家や作品についての解説と、ちょっとした問かけが書かれています。数字を活用したデザインや、サイコロを振るアクティビティなど、工夫を凝らした内容になりました。



美術館探検隊 探検のしおり

拡張リニューアルによって広くなった美術館を探検し、千葉市美術館に親しんでもらうためのツール。まめ知識やちょっとしたクイズも!



おもに子どもを対象とした鑑賞ツールがほとんどですが、もちろん大人の方にも楽しんでいただける内容になっていますので、千葉市美術館へお越しの際は、鑑賞ツールを手にとってみてください。

新連載



びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー
本をみる、美術をよむ vol.1

今回のテーマ：「宮島達男 クロニクル 1995-2020」とあわせて読みたい3冊



宮島達男 『解体新書 すべての人間の存在のために』



宮島さんの制作の背景にある思想を深掘りした1冊。「アートはあなたの中にある」という意味を持つ「Art in You」や1980年代から掲げている3つのコンセプトをはじめ、作品やプロジェクトの芯となる部分をインタビュー形式で読み解くことができます。

「時の蘇生・柿の木プロジェクト」実行委員会
『柿の木の物語 長崎で被爆した柿の木とその子どもたちが教えてくれる大切なこと』



宮島さんが1995年から取り組んでいるプロジェクト「時の蘇生・柿の木プロジェクト」を紹介した本。プロジェクトの経緯や内容について、詳しく書かれています。世界中に植えられた「柿の木2世」を通して、平和を願う1冊です。

田口ランディ 『生きる意味を教えてください——命をめぐる対話』



作家の田口ランディさんが、9人の作家や学者、映画監督などと交わした対話をおさめた対談集。対話のテーマは「生きるってどういうことか」。宮島さんご本人が、展覧会にあわせて選書してくださった5冊の本のうちの1冊です(残りの4冊はぜひびじゅつライブラリーでお読みください!)

紹介した本はすべて4階 びじゅつライブラリー 特集ブース にて紹介中!

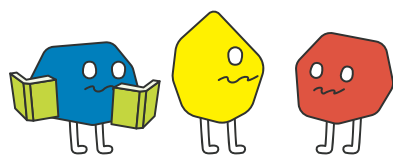
びじゅつライブラリーって
どんなところ?



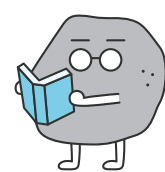
びじゅつ
ライ
リー

千葉市美術館4階に新しくできた図書室です。美術にまつわる本約4500冊を、自由に読むことができます。たくさん本を通じて美術にふれてみませんか?

キャラクターデザイン: KARAPPO



原色3きようだい



石さん